北水試百年こぼれ話 ② 森脇場長の油絵

吉　田　英　雄

キーワード：北水試百年、エピソード、森脇場長、油絵、肖像画

森脇幾茂場長は、1912（明治45）年から1932（昭和７）年まで、北水試歴代１位となる20年間の長きにわたって場長を勤めた方です。

北水試月報12巻８号（1960）によれば、森脇氏は一高時代に野球の捕手で陸上競技100mの選手で水泳も達人で、場長時代は若手の面倒見の良い人柄であったこと、研究面では「サケ仔魚卵殻膜脱出機能の研究（第３回北海道水産試験場業績報告、1910）」で孵化酵素の世界的な発見をした方です。なお、1901年に北海道水産試験場が現在の小樽市高島に設置されたことに伴い、千歳に設置されていた官営千歳鮭鱒人工孵化場は1901年に北水試と合併し、1927年の分離まで北水試千歳支場となります。

こんな背景があったためか、森脇場長の油絵が、官営千歳鮭鱒人工孵化場を前身とする北海道立水産孵化場（恵庭市）で1998年に発見されました。絵のサイズは12F（606×500mm）で、表面は埃で汚れていますが、かつて北水試場長が北海道庁長官並みの官位にあったことを偲ばせるナポレオンもびっくりの大礼服姿です。

絵の右下には「FURUKAWA AFRICANDERA 1934」のサインがあり、裏面木枠の左側には「前場長森脇幾茂氏肖像　古川専一揮毫　寄贈」、右側には「製造部所蔵」の墨書がありました。

先輩達の話では、余市に移転した旧庁舎にはかつて歴代場長の肖像写真が並んでいたとのことですが、現在は何も残っておりません。戦後の労働

組合運動が活発化する中で、場長排斥運動も起きた歴史があり、権威の象徴と見なされた肖像画や写真は消えていったと想像されます。

「森脇氏はサケの研究者なので水産孵化場で保存されるのがふさわしいのでは」とお返ししましたが、その後、2001年の北水試百周年記念事業時に、再び水産孵化場に依頼して送って頂き、現在は中央水試図書室に保管してあります。

古川さんはどこの方なのか、なぜこの絵が製造部所蔵なのか、そしてどうして水産孵化場へ流転したのか、謎は一つも解決されていません。

（よしだ　ひでお　中央水試副場長

報文番号Ｂ2307）